地域とともにある学校づくり推進協議会（鹿児島会場）
パネルディスカッション資料

地域とともにある学校づくり
～目指すべき学校運営のあり方～

学校法人麻生学園
東明館小学校　校長　今村隆信

Ⅰ　地域との連携による学校づくりの意義と実践

コミュニティ・スクール＝ 地域（校区）というドームの中で、学校・家庭・地域が協働して子どもを育てる「共育」の創造

そのために

現状（実態）の把握と分析　これからしかはじまらない。

○　家庭や地域がするべき子育ての内容を学校へ持ち込んでくる傾向
（＝学校教育への過度の依存）

○　子どもの育ちの状況
過保護・過干渉の結果としての指示待ちの子
家庭・地域での子どもの「お客さん」扱い

だから

具体的な取組の前に確認したこと

１　子どもを育てる「ねらい」を学校・家庭・地域が共有すること
ねらい＝自分で考え、行動する子どもの育成

２　学校・家庭・地域の役割分担の明確化を図ること

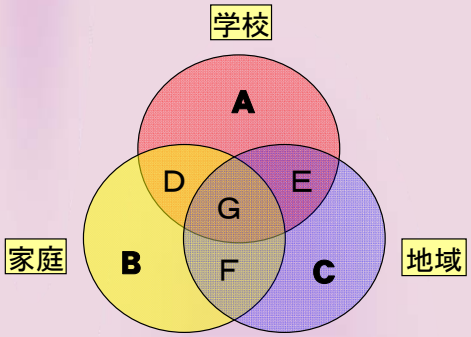
[第1ステージ]平成18・19・20年度

＜子育てのねらい＞

「自分で考え、行動する子どもの育成」

子育ての「ねらいの共有化」

「学校・家庭・地域の役割分担の明確化」の取組



・学校の7つの取組…A

・家庭の7つの取組…B

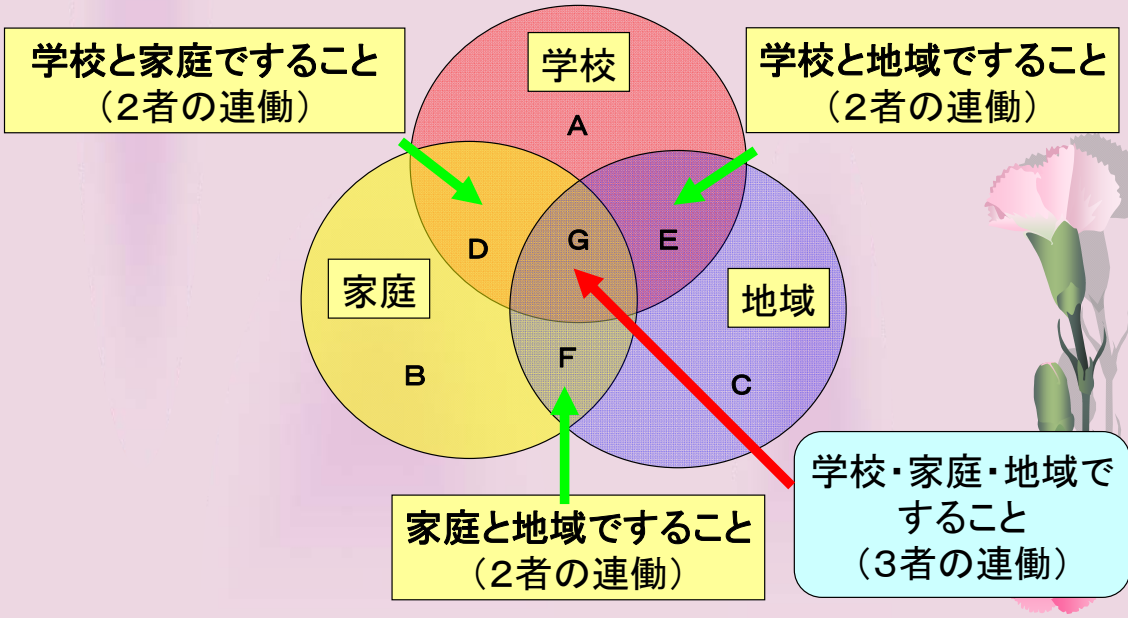
・地域の7つの取組…C

「レインボー・プロジェクト」

〔第2ステージ〕平成21年度～

コンビネーション・プロジェクトの実践

～学校・家庭・地域の連働（＝連結・協働）～



＜2者連働による取組＞

「学校と家庭」のコンビネーション・プロジェクト

「メディアとのよりよい関係をつくりながら家庭学習と読書の習慣をつくろう」

「学校と地域」のコンビネーション・プロジェクト

「西っぴい先生を充実させよう」

「家庭と地域」のコンビネーション・プロジェクト

「公民館寺子屋をつくろう」

＜3者連働による取組＞

「学校・家庭・地域」のコンビネーション・プロジェクト

「『地域を生かす』『地域を学ぶ』『地域と学ぶ』『地域に還元する』ことのできる授業を開発しよう」＝カリキュラムの開発

成　　果

- ○ 生活リズムの獲得 ⇨学力の確かな向上
- ○ 地域の組織の活性化（地域活性部の新設）と予算化
  地域での各種行事等への参加者の著しい増加
- ○ 地域での子どもを「お客さん」にしない取組の充実
- ○ 3者の連働によるカリキュラム開発での教職員の意識の向上
  （アイデアの湧出）
- ○ 批判的立場の家庭や地域の人々のスポークスマンへの変容

などなど

Ⅱ　取組をはじめる際の課題

１　組織づくりを工夫すること

・新規に組織を立ち上げるのではなく、実働組織は既存の組織の活用

・学識経験者（大学教授等）の位置づけ

・校区の自治会の代表者（自治会役員）を構成員に入れること

２　導入に向けた共通理解を図ること

教職員　　保護者　　地域

３　教職員の負担増（多忙感）にならないような配慮

４　実態の把握（特に、家庭・地域の教育力）

Ⅲ　数年経た段階での課題

１　コミュニティ・スクール進捗状況の評価

・到達度の指標づくり

・評価項目づくり

２　継続のためのシステムの工夫・確立

・組織の見直し・・・取組に応じた運営協議会の編成

（自治会長の交代による新自治会長を入れること）

・多忙感を生まないための工夫・・・人の異動を前提に引継ぎの徹底を図ること

・小中連携（中学校区）での取り組み・・・育てる子どもの「ねらい」の一貫性

コミュニティ・スクールの推進は、まちづくり

学校力・・・地域連携のカリキュラム、教育活動
住民の意向を反映した学校運営
学校・地域の情報の共有化
家庭力・・・家庭教育充実のための各種取組
地域づくりへの参加・参画
地域力・・・子どもが育つ地域づくり
子どもから大人までの共生の地域づくり

↓

ドーム全体の活性化

↓

まちづくり

実践の合い言葉

してから言え、理屈はあとからついてくる。

できることを、できる人が、できるだけ、無理をせず、ゆっくりと、何か一つでも始めてみよう！！始めれば、何かが見えて、工夫する。工夫をし、続ければ、本物になる。本物になれば、続く。